

<研究報告>

記憶障害の補償における他者の役割

—記憶障害を有する一事例の日常生活場面の分析から—

内田 愛 (東北大学大学院教育情報学教育部)
郷右近 歩 (東北大学大学院教育学研究科)
菊池 紀彦 (独立行政法人国立病院機構西多賀病院)
平野 幹雄 (東北文化学園大学・宮城教育大学特別支援教育総合研究センター)
熊井 正之 (東北大学大学院教育情報学研究部)
野口 和人 (宮城教育大学・宮城教育大学特別支援教育総合研究センター)

要約

記憶障害者の日常生活において見られる記憶障害を補償するための他者のかかわりについて整理分析を行った。他者は問題に対処するための必要な情報を提供するはたらきかけや、記憶障害者の外的補助利用を補佐し外的補助を有効に機能させるはたらきかけを行っていた。また、記憶障害者自身は他者を外的補助として積極的に活用することや、他者の存在そのものから手がかりを得ることによって問題に対処していた。このことから、従来指摘されてきた、記憶障害者の日常生活をサポートし外的補助を定着させる支援者としての役割、記憶障害者にとっての外的補助としての役割以外にも、外的補助の利用過程に介在し外的補助を有効に機能させる役割、記憶障害者が問題に対処する際に手がかりとして活用できる情報資源としての役割を果たしていることが明らかになった。

I. 問題と目的

従来、記憶障害のリハビリテーションにおいて捉えられてきた他者の立場は、理解者・支援者というものであった。Yamamoto, Izumi, Shimakura, Sawatari and Ishida (2000) は、ある健忘症患者に対して記憶のリハビリテーションを行うと同時に、家族に対しても支援法をアドバイスし、リハビリテーションにおいて家族の果たす役割について検討した。リハビリテーションに参加することによって家族は、スケジュール表やチェックリストの作成、物の置き場所を固定するなど患者を支援するための有用な情報を獲得することが可能となった。そしてそれが患者への有効な支援に結びつく結果となったことが報告された。スケジュール表やチェックリスト等は記憶障害者が円滑に行動する上で有用な資源であり、それらは記憶の外的補助とよばれる。記憶の外的補助としては他にも手帳やメモ、ノート、アラームなどといったものがあげられる。記憶障害者がそれらを継続して利用していくためには、外的補助の利用を促すなど家族や周囲の人々の協力が必要であることが指摘されてきた(青野・剱田・吉光, 2000; 後藤, 1997; 後藤・高瀬・田谷, 1997; 山崎・高岡, 2006)。

このように他者は外的補助を提供する存在、または外的補助をより良く構造化する存在として捉えられる。

支援者としての立場以外にも、他者の存在は外的補助そのものとして捉えられることがある。小林(1998)は、展望的記憶過程に着目し、本人が周囲の人に積極的にはたらきかけることによって他者は有用な外的補助になると述べた。他者に後で用事を思い出させるように頼む、何か予定がなかったかどうか聞くといった行為は、他者を外的補助として活用するものである。また他者が外的補助として機能するのは展望的記憶過程だけに限らない。例えば、ある健忘症患者は、外出する際に必ず隣家にその旨を伝えに行く、自分が思い出せないときには他者に聞くなど、必要に応じ周囲の他者を外的補助としていた(平野・野口・細川, 1999)。他者は必要な情報を保持し、場面や状況に応じて情報の再構成を行い、なおかつ適切なタイミングで本人に情報を提供することができる。したがって、最も柔軟で有効な外的補助となりうる。しかしながら、器具類の場所や使い方を職員に尋ねる患者に対し、問いかけに答えず自分で判断、解決するように促す(小川・宮崎・二階堂・山田・田中・岡本・相原・蒔田・小沢・椎野・堀田・松尾・林, 1989)など、特に記憶障害のリハビリテーション場面では、他者を外的補助として活用することはできる限り抑制されてきた。

実際の日常生活では、外的補助の利用または記憶障害の補償は記憶障害者本人のみによって遂行されるとは限らず、他者がそこにかかわり影響を及ぼしている可能性も考えられる。特にその障害が重篤である場合、多くの場面で記憶障害者の周囲に他者が存在しており、困難に直面した場面や外的補助を利用する場面などでは他者の方から積極的にかかわることがあると考えられる。また記憶障害者自身も、身近にいる他者を頼りにすることやごく自然に他者にはたらきかけている可能性があるものと思われる。ところが、外的補助の利用を定着させるためには家族などの支援が必要であること、記憶障害者が外的補助として他者を利用しうることが指摘されてきたものの、日常生活において記憶障害者が困難に対処するために行う行為に対しどのように他者がかかわっているのか、また、記憶障害を補償する上で他者がどのような役割を果たしているのかといったことについての検討はない。本稿では、記憶障害者の日常生活において実際に確認される外的補助の利用場面や記憶障害の補償場面に着目し、記憶障害を補償するための他者のかかわりについて整理分析を行うこと、その上で他者が果たしうる役割について考察することを目的とする。

II. 方法

1. 対象者

対象者は1986年生まれ、右利きの女性、M.H.。20歳。1998年(当時12歳)12月頃から身体の不調が目立ち始め、その後、病院にて脳腫瘍との診断を受けた。なお、腫瘍ができていたのは松果体周辺部であった。1999年2月に腫瘍の除去手術が行われた。手術以後、M.H.は特に情報の記銘・想起場面において困難を示すようになった。1999年10月から原

籍校である中学校の特殊学級へと通い始め、養護学校高等部を経て、現在は心身障害者通所援護施設（以下、作業所）に通っている。

2003年に実施されたWAIS-Rでは、言語性IQが79、動作性IQが52であり、全IQは65であった。なお、動作性IQの低さには脳腫瘍除去手術以後に生じた運動能力の低下が影響している。WMS-Rでは、言語性記憶が57、視覚性記憶、一般記憶が各々50未満、注意/集中力が63、遅延再生は50未満であった。2004年に実施された日本版リバーミード行動記憶検査では標準プロフィール点が1点であり重度の障害が認められた。

検査結果に示されるように、M.H.の有する記憶障害は重篤なものである。日常生活場面では記憶障害により様々な問題が生じていた。例えば、M.H.は数分前のことでさえ思い出せないことがしばしば見られた。それにより、同じ発言や同じ行動を何度も繰り返すことや、他者から行うよう指示されたことを遂行できずに途中で途方に暮れてしまうといった場面が見られた。また、目的地や道順等に関する情報を把握することに困難を抱えており、外出先では待ち合わせ場所に向かうことができない、トイレに行った後戻ってくるができない、帰宅する際に利用するバス停を見つけることができない等のことが生じていた。

2. 観察および記録

2002年4月より、週に1、2回の割合でM.H.の自宅に伺い、彼女と日常生活での活動を共にしながら観察を行った。2002年5月から9月にかけては月に一度、M.H.が診察に通う病院にも同行し、診察の様子や身体機能のリハビリテーションの様子についても併せて観察を行った。2002年10月から2003年3月にかけては、週に2回M.H.の通う養護学校にて登校時から下校時までの活動の様子について、2005年4月から2007年現在までは、週に1回M.H.の通う心身障害者通所援護施設にて登所時から退所時までの活動の様子について、併せて観察を行った。なお、1回のかかわり時間はおよそ8時間である。記録は、かかわり終了後筆記による記録が主であったが、可能な場合はビデオカメラやICレコーダーによる記録も行った。

Ⅲ. 結果

記憶障害によりM.H.が困難に直面した状況、あるいは困難が生じることが予想される状況において他者の存在がかかわっていた場面を抽出し分析を行った。その結果、他者がM.H.にはたらきかけるという場面と、M.H.が他者を活用する場面が見られた。以下それぞれの場面について示す。

1. 他者がM.H.にはたらきかけた場面

他者がM.H.にはたらきかけた場面としては、困難に対処するための直接的なはたらきかけ、外的補助の利用を支援するためのはたらきかけ、支援を特に意識せずに行っていたはたらきかけの3つのパターンがあった。それぞれの詳細について以下に示す。またTable 1

にそれぞれの具体例について示す。

1) 困難に対処するための直接的なはたらきかけ

他者はM.H.が直面する困難を軽減するために、事前にM.H.が行うべき行動を確認する、M.H.の代わりに必要な情報を保持し適切な場面で伝える、ということを行っていた。

他者が事前にM.H.の行動を確認するという場面は、M.H.が移動する際や要求された活動を行う際に見られた(エピソード1)。他者がM.H.に声を掛け、行動を確認することにより、M.H.は自分がしなければならないことを明確に理解することができていた。またそのことにより、確認された情報を口頭で繰り返しながら行動をする、同じ活動を行う他者と共に行動するなどをM.H.が始めることがあった。

M.H.の代わりに他者が必要な情報を保持し適切な場面で伝えるということは、他者がM.H.と共に行動している状況で困難に直面した際に見られた(エピソード2)。他者は、困難が生じた場面で自身がその時に知っている情報をM.H.に提供するということや、困難が生じることをあらかじめ想定して必要な情報を覚えておき、M.H.が困難に直面した場面でそれらの情報を伝えるということを行っていた。

2) 外的補助の利用を支援するためのはたらきかけ

他者はM.H.が記憶障害を補償するための手段としてメモリーノート等の外的補助を利用していることを知っており、M.H.に外的補助の利用を促す、M.H.が外的補助を十分に利用できなかった時に利用を補佐するというところを行っていた。

他者がM.H.に外的補助の利用を促すという場面は、主に、出来事の記録をノートに記載するというM.H.が毎日行っている行為に対して見られた。他者はM.H.が毎日の出来事をノートに記入していることを知っており、M.H.が一連の活動を行った後、または区切りのいい時にノートを利用するように促していた。また、出来事の記録以外の事柄についても、M.H.が情報を忘却してしまうことを想定し、ノートに記載しておいた方がいいと他者が判断した場合は、M.H.にノートを利用するように促すこともあった(エピソード3)。

M.H.が外的補助を十分に利用できなかった時に利用を補佐するという場面は、外的補助の利用が困難になっていると他者が気付いた際に見られた。M.H.はノートを参照した際、なかなか必要な情報を見つけられないことがあった。そのような時他者は、どのページを見ればいいのかを教える、あるいはM.H.に考えさせるなど、情報を焦点化させるはたらきかけを行っていた(エピソード4)。また、M.H.がノートを利用している最中に何を記入すべきか忘却してしまった場合には、他者が記入すべき内容を教えるといったことも見られた。

3) 支援を特に意識せずに行っていたはたらきかけ

M.H.を支援するというところを特に他者が意識していない場合でも、他者のはたらきかけが結果としてM.H.における外的補助利用に影響を及ぼすということがあった。

M.H.の外的補助利用に影響を及ぼしたはたらきかけは、他者が何気なくM.H.に話しかけたことであった(エピソード5)。他者自身はM.H.に外的補助の利用を促すことを目的とし

も、特に他の人為的な外的補助が利用できる場面ではその利用を阻害するものとして、むしろ抑制されるべきものとされた。その背景には、誰も頼れる人物がいない状態でも記憶障害者が一人で問題に対処できることを目指すという考え方があったと推察される。しかしながら、実際の日常生活では他者と記憶障害者が相互にかかわる場面は多く、本稿の結果でも確認されたように、他者は M.H. が困難に直面しないようあらかじめ必要な情報を確認することや、M.H. が困難に直面した場面で適切な情報の提供を行っていた。また M.H. 自身は、必要な情報を得るために他者に対して積極的なはたらきかけを行い、他者から必要な情報を引き出していた。このように相手に積極的にかかわることで記憶障害を補償するという行為は、日常生活ではごく自然に行われていた。

上述以外にも、記憶障害の補償に関連する他者のかかわりとして以下の 2 つが確認された。一つは、記憶障害者自身が行う外的補助の利用過程に他者が介在し、外的補助を有効に機能させていたということである。記憶障害者が外的補助を利用することは実際のところ決して容易ではなく、自らが記憶障害を抱えていることを十分に記憶できず病識がないため補助具を利用しない(井上, 1995)、補助具を利用することを忘れる(布谷・岡島・椿原・本田・千野・鹿島, 1993, 後藤, 1997)、扱い方や使用法を学習することができない(鈴木, 1995; Wilson, Emslie, Quirk, & Evans, 1999; 安田・三須・村杉・宮崎・中村, 1999) といったことが指摘されている。また、外的補助利用において生じる困難さは記憶障害に起因するものだけでなく、外的補助そのものが有する限界性や本人がおかれている環境といったことから生じるため、利用はさらに難しくなる(内田・郷右近・菊池・平野・野口・熊井, 投稿中)。しかしながら、他者が外的補助の利用過程に介在することにより、それらの問題を解決することが可能となる。他者は、タイミング良くきっかけを提供し、必要な情報の焦点化、状況に応じた情報の再構成など、記憶障害者の補助具利用を補填する活動を行っている。

なお、外的補助の利用に他者が影響を及ぼすことに関しては、健常者の展望的記憶課題において指摘されている(小林・丸野, 1994)。健常者の場合、課題実行場面で他者への暗黙の期待をもつことによって外的補助の利用が抑制されることが示された。記憶障害を有する M.H. の場合も、他者の存在に期待し外的補助が利用されないことがある。しかしながら外的補助を抑制する以外にも、前述したように他者の存在によって外的補助の利用が補填され促進されることも実際には生じていた。健常者において外的補助利用の抑制のみが確認され、他者による外的補助利用の補填・促進が見られなかったのは、健常者は外的補助を利用している最中において失敗することがほとんどなく、他者による補填を必要としなかったためであると推察される。ただし記憶障害者は前述したように外的補助を利用する段階で様々な困難を有するため、外的補助をより有効に利用するためには他者の介入が必要となる。このことから、他者が外的補助の利用を補填し促進させるという役割は記憶障害者の場合において顕著に見られるものだといえよう。しかしながら、これまで記憶障害に関する研究分野では本人がどれ程外的補助を使いこなせるかが主たる着眼点だったため、

他者が外的補助の利用過程に及ぼす影響についての検討はほぼ皆無であった。

もう一つは、他者の存在そのものが記憶障害者にとって問題に対処する際に活用できる情報資源となるということである。これは、これまで想定されてきた外的補助としての他者の役割とは若干異なる。小林(1998)は、外的補助(小林は外的記憶装置とよぶ)について「予定を記入した手帳、何かを置いた場所、思い出させてくれるよう頼んだ他者など“記憶を目的として主体が意図的に構成した環境”」と定義している。すなわち、利用者である主体自身が“意図的に”はたらきかけることが必要となる。しかしながら、記憶障害を補償しうる有効な情報が得られるのは、意図的に情報を委ねる・引き出す場面だけではない。例えば、積極的なはたらきかけがない場合でも他者の存在や行動により、進むべき方向や行為の意図、ふさわしい振る舞いなどを読み取ることが可能である。実際、M.H.においては移動する際に手がかりとしていることや、自分が行うべき行動を判断するための手がかりとしていることが見られていた。

記憶障害者が他者を外的補助としてではなく情報資源として活用することについて詳細に検討した研究はない。しかしながら我々は日常の多くの場面で外界にある情報資源をもとに行動しており、それは記憶障害者も例外ではないと考えられる。Norman(1988)は正確な行動をするための知識の全てが頭の中に入っているわけではなく、頭の中、外界、さらに外界がもっている制約の中に分散した形で存在することがあると述べている。言い換えれば、日常での行動の多くには、記憶として内在する情報だけでなく、外界にある情報や物理的な制約、文化的な制約が活用されている。記憶障害者が困難に対処し、行動する際にも同様のことがいえる。他者を含む周囲に存在する様々な情報資源が行動を規定するための手がかりとなり、結果的に記憶障害者本人に内在する情報が補われ、記憶障害が補償されることになる。ただし、Normanが指摘するように、外界に存在する情報資源の問題点として、「まさに適切なその場所にいる時しかその知識は使えない。他の場所にいたり、前の時から外界が変化してしまっていたとしたら知識は失われてしまう」ということがある。特に他者については存在する場所、保有する知識などに関して変化が著しい。記憶障害の補償研究において意図的に構成した外的補助のみが着目され、それ以外の情報資源についてはあまり検討されてこなかった理由としては、後者が状況に大きく左右されるものであり、常に確実に利用できるものではなかったためであると考えられる。

ここまで述べてきたように、記憶障害の補償において他者が果たしている役割は、従来言及されてきた以上のものが確認された。記憶障害の補償は本来、本人のみの活動ではなく他者の存在を含め相互作用的に成り立つものである。これまで、記憶障害者本人が積極的に問題に対処し記憶障害を補償するということが要求されてきた。しかしながら、他者の存在や周囲にある情報資源から影響など、外界とのかかわりにも着目し、その中で記憶障害の補償がどのように遂行されているのかを検討していくことも必要であろう。今後は、他者の存在に限らず、記憶障害者本人が行動する際に外界からどのような情報を取り入れ活用しているのか、さらに検討を行うこととする。

Table 1 他者が M.H.にはたらきかけた場面の具体例

困難に対処するための直接的なはたらきかけ	
エピソード 1	<p><u>事前に M.H.が行うべき行動を確認する</u></p> <p>教室にいる生徒達に対して、教師は次の活動がプレイルームで行われることを伝え移動を促していた。M.H.が教室を出ようとした際に、教師は M.H.へと近づき、「プレイルームだからね」と声を掛けた。それを聞いた M.H.は「プレイルーム、プレイルーム…」と口頭で繰り返しながら教室を出て行った。M.H.は教室のある棟からプレイルームのある棟へと移る分岐点に来たところで、立ち止まり「プレイルーム」と確認するようにつぶやき、プレイルームへと向かう階段を上っていった。</p>
エピソード 2	<p><u>必要な情報を保持し適切な場面で伝える</u></p> <p>校外学習の際、M.H.を含む数名の生徒と教師はレストランに入った。ショーウィンドウで M.H.は「チャーシュー入りネギそば」を食べたいと言っていた。店の中に入り、各自メニューを決めた後、注文するために店員を呼んだ。ところが、M.H.は自分が注文するものを忘れてしまい、他のメンバーが注文した後、再度メニューを見て選ぶことになった。店の外で M.H.が食べたいと言っていたものを他者が M.H.に伝えると M.H.は同意し、それを注文すると決めた。再度店員を呼び、メニューを注文しようとしたが、やはり M.H.は何を注文するのか忘れてしまっていた。そこで、他者が M.H.に代わって「チャーシュー入りネギそば」の注文を行った。</p>
外的補助の利用を支援するためのはたらきかけ	
エピソード 3	<p><u>外的補助の利用を促す</u></p> <p>昼食を取るため、M.H.と他者は、レストランに入った。食べ終わった後、M.H.が時間等をノートに記入するのを見ていた他者は、「家に帰ってから小遣い帳をつけるから、値段も書いておいた方がいいんじゃない？」と勧めた。M.H.は「そうか」といってノートに昼食で使った金額を書き込んだ。帰宅後、M.H.はノートに記載されていた金額を確認し、小遣い帳をつけていた。</p>
エピソード 4	<p><u>外的補助の利用を補佐する</u></p> <p>2 時間目の授業が終了し、次は移動教室であった。M.H.は一人で廊下に立っていた。他者が近づき「次は何をするのか分かる？」と M.H.に声をかけた。M.H.はポケットに入っているノートを取り出し開いた。ページをめくり週の時間割が書かれているページを見つけたが、それは約 1 ヶ月前の 9 月 9 日から 13 日までのものであった。他者が「今は 9 月？」と尋ねると、M.H.はノートの一番後に記入してあるページを見て「10 月 3 日」と答え、再度今週の時間割を探し始めた。M.H.が前の方のページをめくっているのを見た他者は「今は 10 月だから？」と M.H.に声を掛けた。M.H.はそれを聞いて、「そうか」と頷き、今日の日付のページを開き、そこから逆にページをめくり、その週の時間割を見つけることができた。</p>
支援を特に意識せずに行っていたはたらきかけ	
エピソード 5	<p><u>外的補助利用に影響を及ぼした他者の何気ない言動</u></p> <p>放課後、M.H.は担任の教師から、明日行われる H 施設の見学の時に最初に挨拶してくださいと言われた。M.H.の近くでそれを聞いていた他者が、「すごいねー。代表だってよ。1 年生の代表だよ！」と言った。それを聞いてうれしそうな顔をした M.H.は、「代表で挨拶すること書いておこう」と言ってノートを開き、明日 H 施設で代表の挨拶をすることを書き込んだ。</p>

Table 2 M.H.が他者を活用していた場面の具体例

積極的に他者に尋ね必要な情報を得ようとする場合	
エピソード6	<p>【周囲の他者に必要な情報を尋ねる】</p> <p>自宅でM.H.と他者は今日の予定を立てた後、駅前に向かうためバスに乗った。バスに乗ってしばらくした後、M.H.は同行していた他者に「図書館だから、次のバス停で降りるんじゃないよね？」と尋ねた。それを聞いた他者が「今日は大学に行くから、私たちが降りるのはS駅だよ」と伝えると、M.H.は「そうですか、ありがとうございます」と答えた。</p>
困難に対処するために他者の存在を手がかりとする場合	
エピソード7	<p>困難を回避するためにあらかじめ他者と行動をともにする</p> <p>教室にいたM.H.は担任の教師から、次の授業が始まるので移動するように言われた。M.H.は教室を出て行こうとするが教室のドアのところで立ち止まり、視線を教室の中にいる教師Tの方へと向けた。教師Tは、次に行われる授業のグループがM.H.と一緒に、同じ教室へと移動するはずであった。周囲にいた他者がM.H.に「T先生を待っているの？」と尋ねると、M.H.は「教室が分からないから」と答えた。その後、M.H.は教師Tとともに目的とする教室へと向かった。</p>
エピソード8	<p>困難に直面した際に他者の存在をてがかりとする</p> <p>次の授業のため、プレイルームに移動するように教師が促していた。M.H.は教室を出てすたすたと歩いていった。そのままM.H.はプレイルームへ行くはずの階段を通りすぎ、作業棟の方へと向かっていった。作業棟の中を進んでいくが、そこには誰一人いなかった。M.H.は立ち止まり、もと来た方向を振り返った。ちょうどM.H.のクラスメート達がプレイルームへと続く階段を上っていくところであった。それを見たM.H.は「あ。あっちだった」と言って、皆の後を追いかけていった。</p>

V. 文献

- 青野香代子・勿田文記・吉光清 (2000) 記憶障害を有する高次脳機能障害者へのメモリーノート訓練. 職業リハビリテーション研究発表会発表論文集, 8, 126-129.
- 後藤祐之 (1997) 記憶障害を有する障害者に対するメモリーブック訓練について. 職リハネットワーク, 37, 27-29.
- 後藤祐之 (2006) 支援のための社会資源. 作業療法ジャーナル, 40(7), 689-692.
- 後藤祐之・高瀬健一・田谷勝夫 (1997) メモリーノートブック訓練を実施した軽度記憶障害事例の帰趨について. 認知リハビリテーション, 2(1), 38.
- 平野幹雄・野口和人・細川徹 (1999) 重篤な前向き健忘を伴うある健忘症患者の自然文脈における想起—最近経験した出来事の想起を中心に. 東北大学教育学部研究年報, 47, 111-124.
- 井上里美 (1995) 病変の異なる病識の乏しい記憶障害患者のリハビリテーション. 江藤文夫・原寛美・坂東充秋 (編), 高次脳機能障害のリハビリテーション. 医歯薬出版, Pp. 193-196.
- 小林敬一 (1998) 展望的記憶システムの構造. 風間書房.
- 小林敬一・丸野俊一 (1992) 展望的記憶に影響する要因としてのメタ記憶知識の内容とその過程分析. 教育心理学研究, 40, 377-385.
- 小林敬一・丸野俊一 (1994) 展望的記憶における他者の役割—他者への依存が課題の想起・実行を抑制する場合—. 心理学研究, 64(6), 482-487.
- Norman, D. (1988). The psychology of everyday things. 野島久雄 (訳) 誰のためのデザイン? 認知科学者のデザイン原論. 新曜社
- 布谷芳久・岡島康友・椿原彰夫・本田哲三・千野直一・鹿島晴雄 (1993) アラーム付タイマーを用いたメモリーノート導入訓練—記憶障害者に対するリハビリテーションのための工夫—. 総合リハビリテーション, 21(7), 597-601.
- 小川善道・宮崎智子・二階堂登世子・山田稔・田中晃・岡本朗・相原理明・蒔田桂子・小沢由起子・椎野順一・堀田守・松尾文夫・林恵子 (1989) 頭部外傷者に対する生活指導の検討—重度記名障害を有するケースの事例を通して—. 神奈川リハビリセンター紀要, 16, 93-98.
- 鈴木勉 (1995) 記憶訓練において外的補助手段の使用が有効であった1例. 江藤文夫・原寛美・坂東充秋 (編), 高次脳機能障害のリハビリテーション. 医歯薬出版, Pp. 197-199.
- 内田愛・郷右近歩・菊池紀彦・平野幹雄・野口和人・熊井正之 (投稿中) 記憶障害を有する事例における外的記憶補助具の利用に関する研究.
- Wilson, B. A., Emslie, H. C., Quirk, K., & Evans, J. J. (2001) Reducing everyday memory and planning problems by means of a paging system: a randomised control crossover study. Journal of Neurology, Neurosurgery & Psychiatry, 70(4), 477-482.
- Yamamoto, E., Izumi, S., Shimakura, K., Sawatari, M., & Ishida, A. (2000) Memory

rehabilitation of an amnesic patient following limbic encephalitis and a role of family members: a case report. Tokai Journal of Experimental & Clinical Medicine, 25(4-6), 173-181.

山崎文子・高岡徹 (2006) 記憶・病識・視空間認知・遂行機能に問題のある方の事例－メモリーノート活用訓練の試みと社会参加支援. 作業療法ジャーナル, 40(7), 772-779.

安田清・三須直志・村杉光司・宮崎俊行・中村哲雄 (1999) 前向健忘等の支援を目的とした音声出力記憶補助機の開発. 総合リハビリテーション, 27(5), 475-478.